

<国語>

批判的に読む力を高め、国語を学ぶ楽しさを実感する生徒の育成

～考えの形成を核とした国語科指導～

岐阜市立陽南中学校 教諭 大前 剛士

【概 要】

「読み取る力は身に付いているけれど、**楽しさ**につながらない。」このような課題を克服するために、指導計画の工夫では、段階的に批判的な読み方を身に付ける**単元配列の工夫**や、学ぶ必然性を生み出し、その意識を連続させて言語活動に取り組むための単元構想を練るための「**単元構想図**」、生徒が自らの学びを調整する「**見通しカード**」を位置付けて実践を行った。指導方法の工夫では、批判的に読む力を身に付ける「**考えの形成、共有**」の在り方を見直し、**学年の発達段階に応じた追究の在り方**、**選択課題追究の導入**を実践した。また、形成した考えを仲間と共有する過程で、自分の考えの広がりや深まりを自覚し、自己の学びの成長を実感できる**学習過程の工夫**と**I C Tの効果的な活用**を実践した。成果としては、自分の姿を客観視して、自らの学びを調整したり、選択課題で自ら資料を求めたり、学習方法を選択したりするなど、これまで以上に意欲的に取り組んだりする姿が見られた。

1 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

「一人一人の多様な幸せを実現できる社会」を目指す「S o c i e t y 5 . 0」では、「リテラシー」「論理的思考力」「規範的判断力」といった能力が求められる。特に「リテラシー」は端的に表すと「理解して伝える力」であり、国語科の目標にある資質・能力「正確に理解し適切に表現する」とも合致する。また、P I S A 2 0 1 8 の調査を通じて、情報社会における読解力の重要性が改めて示された。テキストを絶対視するのではなく、内容や表現の吟味、妥当性や客観性、信憑性の評価、自分の知識や経験と結び付けた建設的な批判などの「クリティカル・リーディング」が求められている。

これらの力は、読むことにおける考えの形成、共有の指導事項と重なる部分も多い。

- ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにすること。(1年)
- ・文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。(2年)
- ・文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつこと。(3年)

中学校学習指導要領解説 国語編 P.38 より

また、文章の内容や表現を吟味したり、評価

したりするには、豊かな言語能力を身に付ける必要がある。

つまり、批判的に読む力を身に付けていくには、考えの形成、共有を核とした授業実践を行い、正確に理解する力を身に付けると共に、言葉の正誤・適否・美醜に焦点を当てながら言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして言葉への自覚を高めていくことが重要である。

そこで、育成したい資質・能力を、以下のようにつまえた。

- ・理解したり表現したりするために必要な言葉の特徴や使い方についての知識及び技能
- ・理解したことに基づいて、自分の既存の知識や様々な経験とつなげて考えをまとめたり広げたり深めたりする力
- ・国語に対する自覚や関心を高め、言語感覚を豊かにしようと取り組む態度

(2) 生徒の実態から

令和5年度の3年生が行った全国学力・学習状況調査の国語の問題における「読むこと」に関わる結果【表1】と、生徒質問紙に関する回答【表2】を以下に示す。なお、【表2】の数値は「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計を表記している。

問題	学習指導要領	正答率	
		全国	本校
2二	2年エ	63.0%	74.2%
2三	1年ア	74.2%	80.0%
2四	2年オ	67.5%	81.3%
4三	1年エ	50.0%	59.4%
読むこと全体		63.7%	73.7%

【表1 読むことの結果】

質問	内容	全国	本校3年
40	考えを深めたり広げたりしているか。	79.7%	85.8%
47	国語の勉強は好きか。	60.9%	44.6%
48	国語の勉強は大切か。	92.3%	89.0%
49	授業内容は分かるか。	80.1%	78.0%

【表2 質問紙の結果】

【表1】から、「読むこと」領域における正答率は、全国平均と比較すると4%～10%程度、本校が上回っていることが分かる。また、

【表2】の質問40について、全国平均を6%程度上回っている。授業の中でも、根拠を明確にして登場人物の心情を読み取ったり、筆者の意図を捉えて発言したり、まとめたりする姿も多く見られるようになってきた。

だが、生徒たちにそういった力は付いてきてはいるものの、「この言葉にはこんな意味や働きがあったなんて。」「筆者の言いたいことは理解できたけれど、この考え方はこれからの生活に本当に必要なのだろうか。」など、言語感覚が豊かになっている実感や、実生活で使えるかどうかの吟味などの批判的な読みを高めている姿は少ない。また、質問47で、全国平均を16%程度、大きく下回っていることが分かり、それらが国語を学ぶ「楽しさ」や「好き」といえる生徒が低くなっている要因であると捉えている。さらに、国語を嫌いや苦手と感じている生徒の中には「人物の心情や作者の主張を読み取ることの繰り返しがつまらない」「好きな本を読む時間のほうが楽しい」という声もあった。

国語科で目指しているのは、言語活動を通して言葉による見方・考え方を働かせることで、

国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力である。つまり、文章の構成や論理の展開、表現の仕方について目的に応じて精査・解釈することが「正確に理解する資質・能力」につながり、理解した内容に基づいて自分の既有の知識や様々な経験とつなげて考えをまとめたり広げたり深めたりして自分の考えを形成することが「適切に表現する資質・能力」につながると思えた。

だからこそ、「考えの形成」を中心とした学習の在り方を見つめ直すことで、批判的に読む力を高め、国語を学ぶ楽しさを実感する生徒を育成したいと考え、研究主題を次のように設定した。

批判的に読む力を高め、
国語を学ぶ楽しさを実感する生徒の育成
～考えの形成を核とした国語科指導～

2 研究仮説

前述した研究主題を基に、次のような仮説を設定した。

言葉の正誤・適否・美醜に焦点を当てて理解し、自分の既有の知識や経験とつなげ、人間、社会、自然などについて意見をもつ指導を工夫すれば、主題に迫ることができる。

3 研究内容

(1) 指導計画の工夫

- ①批判的に読む力を段階的に身に付ける単元構想や言語活動のつながり
- ②言葉への自覚を高めるための力を明確にした単元構想図の作成
- ③学びを調整しながら主体的に言語活動に取り組む見通しカードの工夫

(2) 指導方法の工夫

- ①批判的に読む力につながる追究の在り方
- ②自分の考えを広げたり深めたりできる交流の在り方

4 実践内容

(1) 指導計画の工夫

- ①批判的に読む力を段階的に身に付ける単元構想や言語活動のつながり

批判的に読む力は、単位時間や一単元の学習で身に付くものではない。継続的、段階的に言

語活動に取り組む中で身に付けていくものである。また、批判的に読む力を高めていくためには、文章の内容を理解することで満足するのではなく、文章を読む目的を明確にし、生徒が読み取った情報を言語活動に取り組む中で活用していく場面を設定することが大切になる。そのために、生徒が魅力を感じる単元を創造し、それらを段階的に指導していくために、3年生では、読むことの単元名を以下のように設定した。

教材名	単元名【言語活動】
握手	プロフェッショナルに迫る～言動から生き方や価値観を捉える【批評文】
作られた「物語」を超えて	あなたの「常識」はみんなの「常識」？ 【報道文の比較】
故郷	平和に向かってどう生きるか～故郷を批評し、考えを深める【意見文】
人工知能との未来 人間と人工知能と創造性	AIは地球を救うのか？～平和な社会に向けて討論し、考えをまとめる【討論】

【表3 3年生 単元配列】

3年生最初の物語文である「握手」では、ルロイ修道士の言動に着目しながら作品を読み進め、その人柄や主人公である私をはじめとする教え子との関係を読み取っていく。私を通して描かれている作品であるため、当然ルロイ修道士を慕っている私と、読者である生徒たちが捉える生き方や価値観は変わってくる。そこを単元の出口にある批評文で交流したことで、着目する言動が同じでも捉え方は様々であることがわかり、批評する楽しさを味わうことができた。

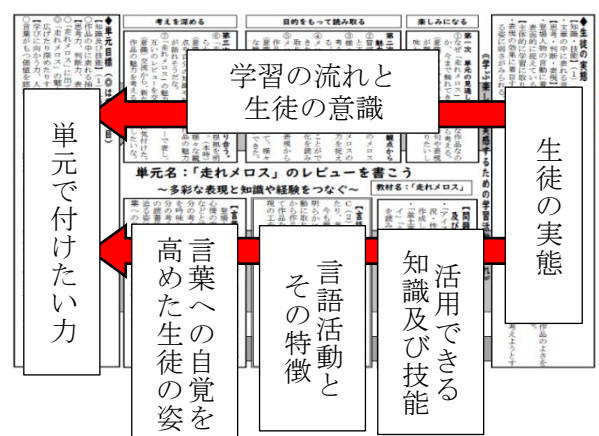
「作られた『物語』を超えて」では、読み取った筆者の主張に対して、「実現性」や「効果」という面で批判的に読み、これまでの経験や知識と結び付けながら考えることができた。「大切な考え方であることは分かるけれど、実際にやってみることは難しいのではないか。」と考えた生徒たちは、「情報社会を生きる」単元で報道文である新聞を比較する際にも筆者の主張を確かめようと読み進めることができた。どれも同じだと思っていた新聞も、書き手や編集

者の意図次第で読者への伝わり方が大きく変わることがわかり、筆者の主張もやはり大切な考え方であったことを実感することができた。

作品や登場人物、筆者の生き方や考え方をそのまま受容するのではなく、「本当にそうなのだろうか。」という視点で精査・解釈したり、それを根拠に自分の考えを形成したりする単元を意図的に仕組んでいくことで批判的に読むことの良さや楽しさを感じる生徒が増えていった。

②言葉への自覚を高めるための力を明確にした単元構想図の作成

単元を通して生徒が目的意識をもって主体的に言語活動に取り組むには、生徒たちの意識のつながりを大切にして単元を構想する必要がある。単位時間やまとまりの中で、どんな学習活動を位置付け、生徒がどんな意識で取り組み、どのような力を付けていくのかを明らかにした単元構想図を以下のように作成した。



【図1 2年「走れメロス」単元構想図】

2年生「走れメロス」の単元では、生徒の実態から、単元で付けた力を『走れメロス』の魅力について観点を明確にしたり、知識や経験と結び付けたりすることで、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。」とした。それに適した言語活動を「詩歌や小説などを読み、引用して解説したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動」とした。今も親しまれる「走れメロス」の魅力について、観点を明らかにして、作品のレビューを書くという言語活動を設定し、読み取った内容を基に、様々な観点から作品の魅力に迫ったり、知識や経験を結び付けて作品を味わったりして、人物像や場面の

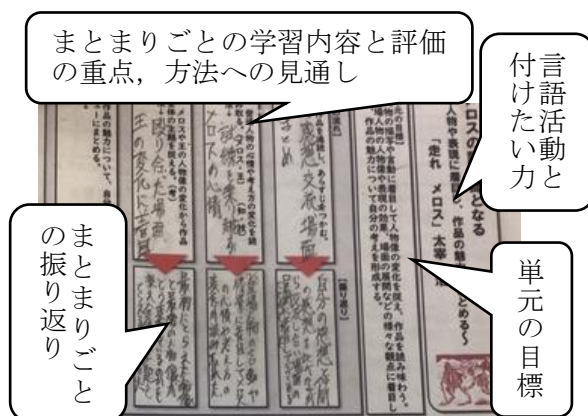
展開, 表現の工夫に触れていくことができるようにした。

学習活動としては、「楽しみになる」(第一次)から「目的をもって読み取る」(第二次), 「考えを深める」(第三次)へと展開し, 「魅力を知りたいし味わいたい→この表現からは魅力につながりそう→様々な観点から魅力が伝えられそう→仲間からも新たな魅力に気付くことができた」のように生徒の意識がつながっていく。

だからこそ, 心身の疲労から気持ちの浮き沈みが激しくなる場面の読み取りでも, まとめを書く際には, 「この場面の魅力はどこにあるのだろう。」という意識をもつことができた。その蓄積が単元の出口に書くレビューの土台となっていく。また, 言葉への自覚を高めた生徒の姿を明記することで, 第二次でどんな言葉や表現に着目して読み取りを行うとよいかという教師の手立ても明確にすることができた。

③学びを調整しながら主体的に言語活動に取り組む見通しカードの工夫

また, 作成した単元構想図をもとに, 以下にあるような「見通しカード」を作成し, 生徒自身が学びを調整することができるようにした。



【図2 2年「走れメロス」見通しカード】

この「見通しカード」には, 言語活動と付けたい力が集約された単元名, 具体的な単元の目標が位置付けられている。さらに, まとめごとの学習内容とその授業で評価する観点を明記している。例えば「③メロスや王の人物像の変化から作品全体の主題を捉える」の学習内容は, 「思考・判断・表現」の評価をするため, 「考」と書かれている。それを生徒が知っていることで, 上段には, そのためにどんな方法で

考えるとよいかを書いたり, 下段の振り返りではどんなことができたかを具体的に振り返ったりすることができるように工夫している。

生徒Aはこの時間の方法として, 「殴り合った場面と王の変化に着目」と記し, 振り返りには「最初に捉えた王の人物像と最後の場面の人物像がどう変化しているかを捉えて主題を考えることができた。」と書いていた。この「見通しカード」のよさは, これまでに身に付けてきた知識及び技能を活用して, どんな方法で課題追究できそうかを自分で考え, それができただろうかを振り返ることができることにあり, それらを繰り返したものが一枚のプリントに収まっているところにある。

【図2】に収まっていない下半分の右側には, 単元導入時の自分の考えが書けるようになっており, 左側には単元の振り返りが書けるようになっている。以下はこの単元における生徒Bの振り返りである。

それぞれの試練で, どのような心情の変化があって, なぜそのように変化したのかを考えて読み取ることができた。(一①)

普通の状態ではないメロスの言動から心情を理解するのは少し難しかった。(一②)

直接描かれていない心情や, 自分の知識や経験からは想像しにくい人物の性格などを捉えることを, 他の物語の読み取りにも生かしていきたい。(一③)

振り返りは三段落構成で書き, ①には単元を通しての自分の目標に対する振り返りを, ②には単元の中でできるようになったことや難しかったことを, ③には日常や他の単元で生かしたいことを書くようにしている。単元の中で使用した自分の学習プリントを読み返したり, タブレット端末にある学びの足跡としての板書や仲間の考えを閲覧したりしながら振り返りをする時間を位置付けている。

このように「見通しカード」を単元の学習中や単元を終えた後にも活用し, まとめごとや単元全体の自分の学びの状況を文章で表現することを通して, 自己の学びを調整する姿につながったといえる。

(2) 指導方法の工夫

①批判的に読む力につながる追究の在り方

豊かな言語感覚を身に付け, 批判的に読む力

を高めていくためには、本文中の言葉の正誤・適否・美醜に着目して理解し、仲間と対話する中で言葉の意味や働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりしていく学習活動が必要となる。それらは特に、考えを確かめたり、自分の知識や経験と結び付けたり、人間、社会、自然などについて自分の意見をもつ「考えの形成、共有」において、自分の考えをもったり、再構築したりする際に身に付いたり、自覚したりできると考えた。

ここでは、導入期の1年生と義務教育の出口である3年生の実践を挙げる。

i 1年『『不便』の価値を見つめ直す』

まず1年生の教材『『不便』の価値を見つめ直す』の学習では、筆者の主張について、共感か疑問かの立場を明らかにして、考えを伝え合うという言語活動を設定した。まず、筆者の3つの事例を読み取るときに「(筆者の考えに対して)本当にそう思うのか」という視点を与え、精査・解釈を行った。それぞれの事例で示されている筆者の考えに対して「本当にそう思うのか」という視点で、一人一人が文章を捉えたり問い直したりしてきた。考えの形成では、各事例に対して共感であるのか、或いは疑問であるのかという自分の考えの立場を明らかにし、日常生活を思い浮かべて自分の知識や経験を振り返り、それらを根拠にして考えを形成することができた。

筆者の考えを鵜呑みにするのではなく、立場を明確にして互いの考えを聞くことによって、その根拠の適否を考えることができた。実際のグループや全体での交流では、立場は同じでも根拠が異なる仲間とは、どちらの根拠により説得力があるのかを考えながら交流したり、立場が異なる仲間でも、納得できる根拠かどうかを考えながら交流したりする姿が多く見られ、積極的にメモに残し、仲間から学ぼうとする姿も多く見られた。このように、筆者の主張とその根拠となる事例について理解したことを振り返ったり、それに対する自分の考えを確かめたりする生徒の姿につなげることができた。

ii 3年「故郷」

次に3年生の「故郷」について説明する。本教材では、単元で付けたい力を『『故郷』の価値を明確にし、平和についての意見文を書き、読み合うことで自分の考えを広げたり深めた

りすることができる。」とし、そのための言語活動として、長年親しまれてきた「故郷」の価値を自分の言葉や知識、経験を通して批評するという言語活動に取り組むことを位置付けた。これは、読み取った内容を基に、様々な観点から作品の価値に迫り、当時の社会に対する魯迅の思いを巡らせていき、自分の生き方や社会との関わり方を考えるという学習である。

本単元では、精査・解釈の際に全員共通の課題で読み取りをするのではなく、「魯迅が読者に伝えたいこと(主題)は何か」という大課題に迫るための選択課題を以下のように位置付けた。

- ① ヤンお婆さんの存在意義
- ② 最後の「希望」についての語り部分
- ③ 人物同士の関係やその変化が表すもの
- ④ 魯迅と「私」

選択課題にしたことで、自分が読み取りたい課題についてじっくりと追究する時間を確保することができた。その結果、④の課題を選択した生徒Cは、教科書に掲載されている竹内好さんの訳と、井上紅梅さんの訳を比較し、共通点や相違点を確かめながら追究を進めた。間接的な表現が多い竹内さんの訳に、直接的な表現を用いる井上さんの訳を補いながら、ルントウと私の経済格差の深刻さや希望に向けての強い願いを読み取ることができた。

また、②の課題を選んだ生徒Dは、シンキングツールを用いて、表現を分類し、そのうえで関連する表現をつなげたり、そこから読み取った内容を書き込んだりして、黒板の板書のように自分の考えをまとめていった。



【図3 Dさんの追究シート】

選択課題にしたことで、自分で見つけ出した

他の資料を活用して考えをもったり、より分析的に言葉と言葉の関係を構造的に捉えながら解釈したりすることができた。このように選択課題で「故郷」を批判的に読み、じっくりと追究した内容を交流しあったことで、考えの形成では多くの生徒が多面的に「故郷」の価値について捉えることにつながった。

iii 1年生と3年生を比べた考察

このように3年生で批判的な読みをしていくためには、言葉に着目して正確に読み取る力や読み取った内容に基づいて考えを形成する力が必要となる。1年生で、立場を二つにしてその根拠を考え、交流し合う中で読み取った内容を確認め合う段階があり、2年生で知識や経験と結び付けて考える段階を経てこそ、批判的に読む力は身に付いていくものであると改めて感じた。

②自分の考えを広げたり深めたりしたことを自覚できる交流の在り方

形成した考えを仲間と共有し、再構築していくためには、①本文との対話（個人追究）、②仲間との対話（グループや全体での交流）、③交流後の自分との対話という学習過程が必要であると考えた。仲間の考えをもとに、もう一度自分の考えを捉え直すことで、言葉への自覚や批判的な読みの高まりにつながるのではないかと考えた。

2年生の「走れメロス」の考えの形成の授業では、自分が捉えた作品の魅力と仲間の捉えた魅力を交流し合い、自分がレビューに書きたい魅力を捉え直すことをねらいとした。

まずは①本文との対話（個人追究）で、今までの学習プリントや教科書を読み返しながら、自分が捉えた魅力をクラゲチャートにまとめた。頭の部分には捉えた魅力を、足の部分にはその根拠を整理した。根拠のシートについては観点ごとに色を変え、自分の中で整理することに役立てたり、交流の際に仲間に伝わりやすくなるようにしたりした。それらを②の交流場面では互いに見せ合ったり、送り合う機能を活用したりしながら共有していく。特に送り合う機能を活用することで、交流後も仲間の意見を読み返すことができた。



【図4 クラゲチャートを活用した交流】

③の交流後の自分との対話の場面では、図の右下に位置付けた仲間の考えと自分の考えを比較しながら自分の考えを再構築することができた。

5 成果と課題

- 令和6年度9月に3年生に向けて取ったアンケートで、国語が楽しいと回答した生徒は68%であった。
- 単元構想図に「言葉への自覚を高めた生徒の姿」を位置付けたことで、目指す姿が明らかになり、各学習過程における身に付けさせたい力を具体的にして指導に当たることができた。
- 「見通しカード」のまとめりごとの学習内容や方法を書く欄に、評価の観点を位置付けることで、これまでに身に付けた力を意識して方法を考えたり、できたことを具体的に振り返ったりするなど、自らの学びを調整する生徒の姿につながった。
- 選択課題での追究を導入したことで、自ら資料を収集して課題解決に向けて取り組んだり、まとめ方を工夫して追究したり、追究中の仲間との対話量が増えたりするなど、意欲的に取り組む姿が増えた。
- ・付けたい力を身に付けるための交流の在り方について、全体交流や班交流などの効果を考えながら適切に位置付けていきたい。また、評価におけるICTの活用の仕方についてもより効果的な活用方法を検討していきたい。

6 参考文献

- ・文部科学省．中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編．東洋館出版．2018